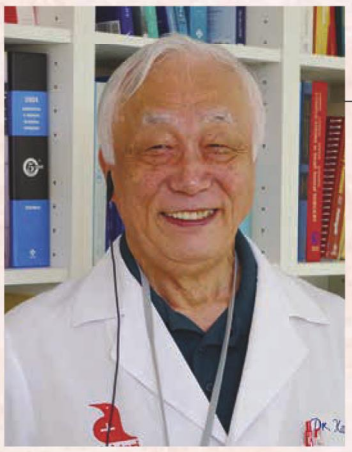
ふるさとを語る

兵庫県は、５つの国から成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

今回は、ダクタリ動物病院総合院長で、昨年、世界小動物獣医学学会第３９回年次大会（南アフリカ、ケープタウン、世界で１３人目、日本人初）「世界獣医療ヘルスケア賞」を受賞された加藤元さんに、古川県人会事務局長がお話を伺いました。



加藤　元

かとう　げん

神戸市（兵庫区）出身
1932年9月8日　神戸市生まれ
主な経歴　1956年北大卒業後、神戸市立王子動物園勤務
1962年退職後上京、動物病院実習
1964年東京都で動物病院開業
1986年からコロラド州立獣医科大学客員教授
2014年「世界獣医療優秀ヘルスケア賞」受賞
出身校　旧制神戸第二中学校→新制県立夢野台高等学校、北海道大学獣医学部

神戸市兵庫区のご出身と伺いましたが、最初にふるさとの思い出についてお聞かせください。

小学生の頃には馬丁さんと仲良しになって、学校そっちのけで（今で言う不登校ですね）装蹄所で馬の世話を手伝ったり、挙げ句にはご褒美に馬に乗せてもらうなど、想い出で溢れています。

どのようなきっかけで獣医師を志されたのですか。

小学校4年生の時、小津茂郎さんが書かれた「愛馬読本」という本に巡り会いました。当時、大人たちから「馬は危ない」と、現在の交通安全教育のように言い聞かされていました。ところが「愛馬読本」では、欧米の子供たちが馬と自由に遊んでいることが活き活きと描かれているのです。それで、だんだんと馬に近づき、触れるようになり、本の通り「危険な動物ではない」と判りました。そして、「愛馬読本」を読めば読むほど、人間のお医者さんと同様に、動物たちにもお医者さんが必要であることがよく分かるようになりました。

もう1つは、馬丁さんにも2種類の方がいることに気づいたことです。真夏、神戸の坂道を馬たちが全身から汗を流して荷車を曳くとき、重荷に耐えかねて滑って前足を擦り剥いているのに棒や鎖で叩く人と、荷物の量を減らして何回かに分けて運ぶ人がいました。子供ですから弱い方の味方をしたい、だから馬たちがいじめられないように動物のお医者さんになりたい、と思いました。しかし馬だけではなく、すべての動物のためのお医者さんになりたいと思いました。

旧制神戸第二中学校に進学されましたが、その頃の思い出についてお聞かせ下さい。

私が旧制神戸二中に進学したのは1945年、終戦の年でした。当時は戦争の影響でひどい食糧難に陥っていました。戦争があと半年も続いていたら餓死して、今、このように皆さまの取材を受けることはできなかったと思います。そういう意味で、平和を守ることの大切さを噛みしめています。

その後、北海道大学に進学されますが、どのような学生時代でしたか。

昭和20年代、国立大学の一期校で獣医師の養成課程があったのは、北大と東大だけでした。どちらを選ぶかの決め手になったのは、北大は獣医学部が農学部から独立した学部として存在していることと、「愛馬読本」から、北海道には他の府県より私の好きな馬が圧倒的に多い本場であることを知っていたからでした。

進学後、私は馬術部に入り、競技馬術で全日本大会と国体に出場しました。また、私が教えた後輩が東京オリンピックに出場したのは誇りです。こうしたことから、同窓会でも北海道大学馬術部卒業、というぐらい馬術にのめりこみました。今でも、毎年、アメリカの学会やCSUに参加（毎年6回）した際など必ず乗馬を楽しんでいます。

また、私は動物のお医者さんを目指していたので、仲間と一緒に「野獣学科」だと称して、実習の場に札幌の丸山動物園を選び単位を取りました。

一方で、大学の休みのたびに東京・神田の古本屋巡りを楽しみました。ところが、自分の専門である獣医学の臨床の専門書はゼロ。そこで、海賊版の人医学の原書を辞書と首っ引きで読んでみると、ロジカルで読みやすいことが判りました。逆に、日本の自然科学系（人医学）の専門書は引用ばかりで結論がなく、何が言いたいのかよく判らない。こうした経験は、後年、私が小動物（ペット）獣医学のバイブルとされる専門書「Current Veterinary Therapy／小動物臨床の実際」や各科専門書（すでに確立されていた）を翻訳するのに大いに役立ちました。

大学を卒業後、神戸の王子動物園で研鑽に努められた頃のお話をお願いします。

文字通り、「小鳥から象までの動物たちと寝食を共にする」日々でした。神戸市立王子動物園もお役所のうちですから、小鳥1羽でも死ぬと獣医技師として報告書を作らなければならない。報告するためには病理解剖が必須でしたから、来る日も来る日も病理解剖と体力をつけることに明け暮れていました。

最初は動物がなぜ死ぬのか判らなかったのですが、「石の上にも三年」という諺のとおり、3年ほどすると、飼育員たちが担当する動物が可愛いあまりに、栄養過多、いわゆるメタボが原因だと見えてきました。

王子動物園では6年間、小鳥から象まで寝食を共にしましたが、人や動物たちはどのように死ぬのかという病理学の実学経験を多く積み、その後の開業生活の中でも非常に大きな役割を果たしています。

その後、ダクタリ動物病院を開業されましたが、東京で開業された理由は何ですか。また、どのような動物病院を目指されましたか。

学生時代に東京へしばしば立ち寄っていたので、関西にはない東京の雰囲気、政治・学問・文化・経済など、あらゆる分野の中心であり、動物のお医者さんをやる土俵の大きさが神戸と全く違うことを自然と知っていました。これが東京を選んだ理由です。

開業前に2年間、虎ノ門の獣医さんのもとで見習いをしました。きわめて原始的な時代で、玄関に置いたテーブルを診察台兼手術台として使用、最低限の手術道具と顕微鏡があれば開業できました。ですから、「玄関獣医」という言葉もあったぐらいで、人医療の関係者からも病院だと納得できるものにしたかったのです。

ダクタリ動物病院を飼い主の家庭・家族の一員としての「人と動物と双方の幸せのため」診療を行う、ヒューマン・アニマル・ネイチャー・ボンド（人と動物と自然の絆）の理念にふさわしい動物病院として開院したかったのです。

私はもの言わぬ動物たちにも、人間と同様の科学的知見に基づく治療を行いたいと考えていました。仲間より早くレントゲンと冷房付き入院室を50年前に導入しました。現在、ダクタリ動物病院東京医療センターには、CT、超音波、心電図、内視鏡、胸・腹腔鏡手術装置、ホルセンアッセイなど、人間の病院と同様の設備を整え、人間の病院では1週間もかかる診断を2時間以内にできるようにしています。

先生が開業されて半世紀が過ぎましたが、ペットを飼う人の意識には変化があったのですか。

日本語には「犬畜生」という言葉があります。私が開業した頃、犬を飼うのはほとんどが番犬という意識しかなく、犬や猫にとって怖い病気の予防ワクチンの接種、フィラリアの予防もなく、外で鎖につないで残飯を与えるというのが常識でした。

現在、開業した頃から数えるとクライアントも第3世代となっています。欧米諸国のように犬や猫と共に暮らす、という文化が根付きつつあります。阪神・淡路大震災や東日本大震災の際にはじめて犬や猫たちが人々を慰め、元気と勇気を与える存在であることを示してくれました。改めてマスコミの言うアニマル・セラピーが注目され、動物たちの日本の社会への貢献が証明されたのです。

このたびは日本の獣医師人初、世界で13人目となる「世界獣医療ヘルスケア賞」の受賞、おめでとうございます。どのような点が評価されて受賞に至ったと自己評価されていますか。

開業前に見習いをして半年もすると、自分では免許皆伝だと思い、結婚をきっかけに独立したのですが、実際には判らないことだらけでした。大学や学会に聞けばいいやと思っていたら、全然ダメ。これは原書で勉強しなければと思っていたところ、府中市にあった駐留米軍司令部に勤めていたクライアントが、基地に所蔵されている獣医書を読める機会を与えてくれました。それが、一番大切なバイブル「Current Veterinary Therapy」だったのです。

この本を仲間に紹介し、みなさん原書で購入されたのですが（当時は1ドル360円固定制）、ほとんどの方が英語を読めない。そこで、私が下手な訳を仲間に聞かせると、みんなから「お前、仲間のために翻訳しろ」と言われ、最初は若造の開業医が翻訳なんて…と断り続けていました。そのうち、続刊が出てくると、同じことの繰り返し。これらの翻訳書（原書）を読む獣医師と読まない獣医師では動物を大切にする人々のためにできるサービスが違う。例えばヒルズ（フード会社）の処方食、食事療法の大切さひとつをとってもそうです。そこで「これはしょうがない。腹を決めよう」ということで、本格的に翻訳を始めました。その結果として、今日の成果を見れば、これを契機として盛んになった原書の翻訳は、日本の小動物臨床を根本から変えるものになりました

振り返ってみると、「Current Veterinary Therapy」を仲間のために訳し続けていることが、日本の動物を大切にする人々の求めるヘルスケアに大きく役立つ結果となり、受賞の主な要素になっていると思います。現在までにアメリカの専門書を43冊訳し、結果として犬や猫に対する認識（犬や猫は家庭・家族の一員、パートナー）も社会全般にわたって変わりました。

先生は80歳を越えてなお、海外出張を含めて精力的に業務をこなされていますが、その秘訣を教えてください。

北大のクラスメートにプロスキーヤーの三浦雄一郎がいます。自殺行為との批判もある中、彼は80歳で、3回目のエベレスト登頂に成功し、85歳になったらモンブランでの滑降をプランしています。何が彼をそう駆り立てているのか、これは自分自身に対する彼のパッション以外の何物でもありません。私にも、彼と同じ情熱があります。それが神戸の医療特区で展開する「神戸プロジェクト」の実現です。

現在、私は神戸市医療特区で「One Medicine・One Healthセンター」構想に取り組んでいます。これは、私が王子動物園でお世話になっていた頃から開業以来温めていた構想です。

本来、人間の医学と獣医学は本質的に同一であり（One Medicine）、それをそれぞれの健康のために活用する（One Health）べきなのです。日本では歴史的な経緯で人間の医学と獣医学は別個の学問として取り扱われていますが、欧米では車の両輪として考えられています。

今年7月には、神戸のポートアイランドにセンター構想を推進する準備会社も開設しました。最終的には山中教授の世界的な再生医療に役立てば、同志の獣医師たちと共に、世界で唯一のセカンドオピニオン、サードオピニオンを発信できる、世界一の高度小動物臨床医療センターを目指しています。この構想こそが、私の健康と情熱の源となっています。

最後に、兵庫県人会の方やふるさと兵庫に対するメッセージをお願いします。

本来、医学というのは怪我や痛みで苦しんでいる者を助けるのが原点で、これは動物でも変わりません。だからこそ、「One Medicine・One Health」なのです。グローバル化の時代と言われるようになって久しくなりました。しかし日本は鎖国と島国で、医学・獣医学が遅れています。

また、医者というのは精神的に年中無休で、汚れ仕事なので、そこに挑戦する情熱が必要です。

先ほども申したように、今、私がふるさとで実現を目指している「One Medicine・One Healthセンター」構想は、世界で最も発達した「人と動物と自然（地球環境の保全）を大切にする」センターにしようと汗を流しています。

県人会のみなさまの人脈や、ふるさとの人脈を活かしながら本物に育てたいので、ご支援ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。